

情報リテラシー教育と新しい図書館員像

— 『新・図書館の達人』から『図書館利用教育ガイドライン』まで—

仁上幸治（早稲田大学図書館）

【0】はじめに

こんにちは、仁上です。よろしくお願いたします。何か「達人」の後に出てくると、K書店の営業みたいでちょっと恐縮なんですけど（笑）……。日本図書館協会の図書館利用教育委員会（*1）の委員としてこのビデオシリーズの企画・監修に係わってきましたので、今日は、せっかくの機会ですからビデオについてみなさんから厳しい批評をいただいて、次の「達人」の続編に反映させたいと思います。実は今年の図書館大会群馬大会の会場で「新・図書館の達人」の続編の新作4・5・6巻がデビューする予定になってます。現在制作進行中で、シナリオが今第二稿ぐらいになってます。どうぞお楽しみに。

さて、スライドを見ながらご説明しますが、画面に映りますスライドの内容は後で配付資料でお配りしますからメモを取る必要はありません。話の方に集中してください。

【1】ビデオ教材の狙い

（1）『新図書館の達人』と『ガイドライン』

まず「新・達人」のチラシですね。これはもうみなさんご覧になったかと思います。ご説明する前に、「新・達人」を今日初めてご覧になったかた、どのくらいいらっしゃいますか？（挙手多数）
あっ、かなり…そうですか。ではすでにご覧になったかたは？（挙手少数） 3対1くらいですね。そうですか。まだこれ、図書館ではお買いになっていないということでしょうか。あるけど見てないということでしょうか。おっと、何かやっぱり営業みたいになってしまいましたね。（笑）では今日は、旧「達人」の歴史から振り返ってですね、簡単に「達人」シリーズがなぜこういうふうにできたのか、ここまで発展してきたのか、ということをお話ししてから、与えられたテーマ「情報リテラシー教育と新しい図書館員像」ということにつなげることにしましょう。また「達人」が

生まれるもとなっている『図書館利用教育ガイドライン』というのがあります（*2）。これは昨年合冊版が刊行されまして皆さまのお手元にありますね。これもお尋ねしてもいいですか。『ガイドライン』をすでにお読みになったかた？（少数）まだお読みになっていないかた？（大多数）そうですか。じゃ、その内容も後でかいつまんでご説明した方がいいようですね。「大学図書館版」「高校図書館版」「専門図書館版」「公共図書館版」というふうに全部で4分冊出ました。それが合冊されまして、1冊の本になって日図協から刊行されました。

（2）『新図書館の達人』ビデオの概要

では「達人」から行きましょう。まあかなり強引なストーリーで（笑）無理矢理内容をねじ込んでありますよねえ。とにかく初めて見る学生を寝かさないとというのが第一の条件だったわけです。ところどころちょっと寒いギャグも入ってまして非常に恐縮なんですけど（笑）これはもう様々な制約の中で、敢えて入れてあるものですから、しょうがないと割り切っていただきたいと思います。監督さんは実は「ウルトラマン・ティガ」という、ご存じですかね？「コスモス」よりもずっと前のシリーズの岡田寧（やすし）監督なんです。その監督さんがK書店さんと契約してシナリオ作りから現場の撮影演出までやる。それから、編集・完成まで責任を持つという仕事ですね。主人公のメグちゃんというのは実は当時早稲田の2年生だったですかね、演劇を始めたばかりで、オーディションで主役に抜擢されました。

これが（写真を投影して）メグちゃんですね。撮影中の役柄はこんな感じでした。ちょっと地味な服装の役割設定ですけど、実は素（ス）のご本人は極めて対照的でなかなかオシャレなかたでした。ソバージュにウエスタンブーツで早稲田大学の図書館に現れた時は一瞬誰だかわからなかったくらいです。それから

この謎の教授は、劇団「青年団」の座長、平田オリザさんです。普段テレビ出てる時はこういう感じですね。現代演劇界のホープとして、K書店さんから上演記録集ビデオも出しています。その縁で今回大抜擢というか無理矢理頼んだのか、(笑)座長もじきじき御出演となりました。自分でシナリオのセリフを落としちゃったり・・・後で試写版のセリフとシナリオとを見比べると大分違ってらるんですね。まあそれも大物ですから、NGを出せない。(笑)なかなか監督も大変だったみたいです。

それからこのミズキさんという司書役。この女優さんは実際は独身なんです。設定では子供が登校拒否になってしまって困っているワーキングマザー、司書としてもなかなかのキャリアを示してますし、論文も書いてると色々な条件を兼ね備えている人物像ですね。すごく難しい役どころでしたから、ご本人も大変だったみたいです。多分みなさんも役者さんをテレビでご覧になっているはず。マンナンライフのアロエリーナというコマーシャルの中で、実はこのミズキさんが歌を歌ってるんですよ。知らないですよ。(笑)それから男性司書役の役者さんも、アルバイトしてるんですよ。中央競馬会のコマーシャルで、競馬場の柵のところで主役の役者の隣にいてこう顔を出しているという、まあちょっと出てる役ですから、知らない、ですよ。(笑)

それからこの探検帽のカズくんですね。物語はカズくんを持ってると言ってもいいかもしれません。カズくんはあんまりテレビには出てないですけど、声で出てるんですね。広末涼子のドコモのポケベルのCMの「人と人の間にドコモのポケベル」とかいうそのナレーション。もう最近やってないかもしれませんけど。

まあそういうふうに劇団所属のいろんな役者さんをオーディションして役を決めていくという作業が行われたわけです。これは監督が演技指導をしているところ。奥の方にいるのが企画監修中の利用教育委員会のメンバー。この不気味な教授が実はALAの帽子を被っています。アメリカ図書館協会のグッズの「サイバラリアン・キャップ」ですね。この他、いろいろなところにALAグッズがちらちらと映ってるんです。登場したグッズクイズをやろうかという話も出たくらい

で、マニアックなことは「おっ、見つけた」とおわかりだと思えます。

(3) 達人シリーズの歴史

撮影の裏話ばかりやっているとちょっと時間がなくなってしまうので、歴史の話へ行きましょう。この「達人シリーズ」は、ご承知のとおり最初の『図書館の達人』全3巻が出たのが1992年です。ですからもう十年たったということですね。K書店さんの当時の販売促進のチラシがこれです。「達人」の続編全3巻が翌年93年に出版しました。

発端は1991年、利用教育委員会で図書館界のいろんな業者さんを集めた懇談会を開催して「利用教育の教材ビデオを作りませんか？」と呼びかけをしたんです。たくさんいろんな業者の方々に集まっていたので、その中からK書店さんが「ウチでぜひ作りましょう」ということで手を挙げてくれた。で、当時の制作担当の部長さんや担当スタッフが集まって毎週ミーティングです。最初はいったいどのくらい売れるのか非常に不安だったですね。3巻セットで4万8千5百円。単価として非常に高いものですから、個人で買える値段じゃありません。まだ図書館界のどこにも利用教育の教材ビデオがなかった時代ですから、企画監修側の委員もどれだけ受け入れられるかまるで見当がつかない。まあ300セットくらい出ればトントンかな、という話でした。制作サイドは相当な勇気を持って当時決断されたんだと思えます。

そうしたら大変好調に売れてなんと1000セットを突破してしまったんですよ。ボくら監修側もびっくり、K書店さんはホクホクです。(笑)その予想外の大ヒットのおかげで、この後、様々な別シリーズが出ることになりました。このカタログによると、「司書実務編」の1、2、「国会図書館の使い方」、「図書館員のための英会話」と来て、「司書教諭編」も出版したか。もう勢いが出ちゃって「経済文献の達人」「医学情報の達人」「看護と図書館」。すごいですね。まあこのようにシリーズが出たのも、一番最初のこの「達人」が世に出て社会的評価を得たということがあったからということになります(*3)。

当時の販促チラシをご覧ください。これが最初の作

品のチラシですね。「利用者のための図書館活用術」という見出しです。だいたい大学・短大が半分くらい、残りが公共、学校、専門という売上げの内訳でしたね。みなさんもう忘れてしまったかもしれませんね。この主人公覚えてませんか。思い出すでしょ？ 旧シリーズは見たかたは？（挙手）はい、かなり多いですね、よかったあ。（笑）こちらが主役の「劇団木山事務所」の俳優さんですね。この頃はまだ手探り状態で、司書の姿をどう描くかということもはっきりしていなくて、まあフレッシュな新人女性図書館員を主役にしようというふうに決まりました。最初の企画案ではこの主役がお母さんに手紙を書いてひとりで台詞を言うという設定だったんですね。「前略・おふくろ様」みたいなノリでいこうと。で、司書がお母さんに今日図書館であったことを楽しそうに話して段々成長していく物語。しかしそれだと見ている学生が司書に同化することになっておかしいですよ。司書向けじゃなくて学生用の利用教育ビデオなんですから。ということで結局設定ががらりと変わって、学生が司書に相談をして調べ物をしていくという設定に落ち着きました。

第一巻「図書館の機能」が「入門編」で、それに続く第二巻は「文献探索の基礎」。図書・雑誌・新聞をだんだん使い分けながら図書館の使い方に慣れていくという設定でした。そして第三巻目は「雑誌記事の調べ方」で、卒論を書いている4年生の学生がいて見事にレポート・卒論を書き上げて図書館員に感謝するという感動的なストーリーですね。（笑）最後のシーンで学生が「お茶飲みに行きましょう」と司書を誘って出て行くというカットが入っていたもので、「勤務中に利用者とお茶飲みに行っているのか！」と轟々たる批判をいただいてしまいましたね。（笑）まあこれがもう十年前です。

最初のシリーズは早稲田大学で夏休みに撮影しました。次の続編はロケ地を慶應大学に移しました。第四巻「人名情報の探し方」は慶應の三田ですね。この左下の女子学生が閲覧室の片隅で読んでいた文庫本を、この男子学生が何という本だろうというふうに興味を持って、その本を探し当てるまでの感動の物語でして、（笑）その途中にこのキャリアウーマンっぽい信頼感のある女性中堅職員が出てきて探し方を教えてくれる

という設定です。どうしてもまあこういう甘酸っぱい物語をからめたくなる（笑）路線が、当初から一貫していましたねえ。

第五巻「データベース検索入門」は、慶應の湘南藤沢キャンパスです。慶應大学では1巻ずつ舞台を変えました。この巻は卒業生であるビジネスマンが自分の母校に来てデータベースの検索法を習うというストーリーですね。図書館員が元恋人だったか何か親しいような他人行儀のような微妙な関係で、その中でデータベースの検索法を学んでいくという思いっきり無理のある設定でした。（笑）

第六巻は「レポート・論文のまとめ方」です。ロケ地は慶應日吉メディアセンターです。それまでのようにデータの検索法で終わるのではなく、検索結果を元にして最後にレポートを書き上げるところまでを扱うことで、初めて表現の領域に挑戦したことになります。女性司書ばかり登場してたので、石田純一系の素敵な男性司書を出そう（笑）という強い希望を出しました。この俳優さん、みなさん見覚えありませんか。このかたはサクロンの胃薬のコマーシャルで、中谷美紀さんに介抱されてた人ですね。（笑）最近出てないかな？ なかなか素敵な感じだと思いますがどうでしょう。図書館界のビデオとしては初めて造形されたキャラクターだったんじゃないでしょうか。このかたから指導を受けている女子学生二人が彼をめぐって、だんだんライバルになっていくというストーリーでした。まあウサギとカメみたいに、自己流でやっていくこちらの学生はレポートをいきなりワープロでどんどん書いてちゃうんですね。そうするとなかなか上手いかな。それに対して、司書から指導を受けた学生は十のステップを着々と踏んで最終的には早くレポートが書けてしまうという対比になっています。おかげさまでこの続3巻も同じように1000セット以上売れました。

【2】新しい図書館員像の創造

さて、図書館員の姿をどう描くか、それがこの間ずっと大きな問題でした。それをビデオの中に反映させていくためにもう何十回と企画監修会議が開かれているんですけども、その時にまず最初に考えなきゃいけない点が、世間で流通している図書館員のイメージに

対してどういうスタンスをとるかです。この点がやはり企画の基本だろうということで、今回少し考え直してみました。

(1) テレビドラマの中のステレオタイプ

1) 「阿修羅のごとく」

一番最初を振り返ると、もうこれ知ってるかたは相当古いかたなんでしょうね。(笑)実はこれ番組名不詳だったんですけど昨日いろいろ話をしていたら友達が思い出しまして、「阿修羅のごとく」という向田邦子さんのドラマ、TBS かなにかでやったと思うんですけど、これが二十年くらい前なんですね。ご存じですか？(挙手パラパラ)・・・あとでビデオでご覧になったということですかね。やはりこれが当時非常にショックでした。つまり4人姉妹がいます。長女が加藤治子、次女が八千草薫、三女が石田あゆみ、四女が風吹ジュンという設定で、いしだあゆみさんが三女で図書館員というキャストでした。この時の姿がこういう感じなんですね。髪はこう丸くして乗っけて、すごく度のきつい黒縁の丸いメガネをかけてました。職場で映る時はいつも事務服と黒い腕カバー。(笑)キャラクターとしてはわりと地味目で、あまり人と話がしたくないというタイプ。これは多分二十年くらい前の世間の人たちが持っていた図書館員のイメージを忠実に再現したものだったんでしょうね。今だに生きてもいいかもしれないですね。(笑)とにかくもうこの古臭いイメージじゃあダメだろうというのが一番最初の出発点でした。

2) 「素顔のまま」

次に「素顔のまま」というドラマがありましたよね。ご存じないですか？これは安田成美さんがやってて、共演が中森明菜さんでした。石田あゆみさんの図書館員役とは違うところがだいぶあります。まずすごく家庭が裕福です。都内で5LDKくらいのマンションに独りで住んでました。(笑)ただ、人見知り系のキャラクターは引き継いでいます。絵本作家志望で図書館員としては残念ながら腰掛け的な勤務態度で、絵本が売れたら実際あっさり退職してしまいました。最後は幼い子供を残して交通事故で亡くなってしま

うという悲しい結末です。

3) 「ビューティフルライフ」

最近はこれですね、やっぱり。「ビューティフルライフ」の舞台も公共図書館で、常盤貴子さん演じるところの司書が今回は車椅子の障害者という設定でした。カウンターでおしゃべりばかりしていて、職業意識は非常に低いです。(笑)それからキムタクが本を借りると同僚の水野美紀と端末からプライバシーを覗いたりしています。最後は病気で死んでしまうという悲しい結末。このドラマは視聴率もすごく高かったもので、図書館員の情けないイメージを強烈に植え付けられたと思うんですね。まあ何十万人、何百万人と見てるわけですから「図書館の達人」がいくら1000セット売れても(笑)、イメージの影響力ではとても対抗できないわけですよ。やっぱりこの作者・北川悦吏子さんによる設定、それから監督の演出、いろんな面で影響力が段違いです。それに対してこちらが勝てるくらいの素晴らしい図書館員像を見せない限り、いつまでたってもこういう情けない姿がドラマに出続けちゃうんじゃないかなと思います。このキャラクター問題を乗り越えることができるかということが最大のテーマだったとも言えそうです。

(2) ニュータイプの模索

ここで、「達人」ビデオの中の人物造形を振り返ってみましょうか。最初の「達人」で描いた人物像は、初々しい新人女性司書、信頼感のある先輩女性司書。必ず新人の横に先輩が出てきて補佐してますよね。それからキャリアウーマンの中堅図書館員、プロの知識と技能に信頼感のある人。それから気軽に質問できそうな気さくで親しみやすいお姉さんタイプ。そして最後に、TBSのドラマのように貸出と返却しかやっていないとか、エプロンかけて返本ばかりしているとかそういうのではなくて、レポート作成講習会指導サービスもバリバリやるという素敵な男性司書の人物像の登場です。

「新・達人」になりますとこれがさらに、先程のミズキさんですね、自分でも研究活動をして論文を書いて発表したりしていて、教育的指導のプロという感じ

がします。また一方で子育ての悩みを抱えているという生活感もある。同僚の男性司書は真面目でとっても親切、信頼感のある人で、ミズキさんといいいチームワークで支え合っていて、アットホームで温かい雰囲気職場です。それから正体不明な教授というのが出てきますが、この人も実は重要な役割を果たしていました。まず本人が図書館利用の達人であるという設定。そして図書館を使って研究活動をしている。さらに情報リテラシー教育に熱心で学生に対してちゃんと指導をしているし、リザーブ図書に指定した自分の著書の複本を5冊がリザーブコーナーの棚にちゃんと並んでいるか気に掛けていましたね。これが教授という登場人物の意味でした。

【3】『図書館の達人』が描き出した図書館員像

『新図書館の達人』の続編の第4、5、6巻になりますと、今度は図書館員像はどういうふうが変わっていくのでしょうか。これはまだ進行中なので確定していませんけど、もっと進めて研究・調査の専門家に登場してもらえないかということですね。それから学習支援の専門家。この研究調査と学習支援両方とも教えられるふたつの領域の専門家という姿。それから主題の専門家というのがあまり登場してないので、もう少しある学問分野には非常に強い人ということを出そうということになっています。そして三番目に情報リテラシー指導の専門家ですね。ただ研究しているだけじゃなくて、それを学生に伝えることができる、あるいは教職員にも教えることができるような人。そして最後はそういう専門家のイメージをどういうキャラクターにするかということがまた難しいですね。今回できれば少し型破りなキャラクターにできないかな、というのが個人的に秘かな希望ですけど。服装であれしゃべり方であれ、ちょっと現実の図書館にいないような人、こんな人いるのかというぐらいな野性的な奴を出したいなというふうにリクエストしてありますが、さてどうなるんでしょう。実は明後日そのシナリオ会議があるんですよ。完成品にご期待ください。

【3】「専門性」論議の落とし穴ー「専門性」3点セッ

ト論

*三つの条件

1) 書誌知識 2) 主題知識 3) 語学力

「達人」ビデオの登場人物のイメージが専門性論議と絡んでいることは明らかですよ。図書館員というのはどういう専門職なのかということです。そこでまず考え直してみなきゃいけないのは、従来言われているこの三つの専門性ですね。書誌の知識があり、主題の知識があり、語学力のある人。もう何十年来、図書館員はこうでなければと言われ続けてきました。みなさんご自身はどうでしょうか。この三つの条件がもし完璧に備わっていたら、と考えてみましょう。果たしてそんな人が図書館で仕事を続けているのでしょうか？（笑）・・・ね、そんな能力が完璧に備わっていたらその人は何か違う仕事に移ってしまうにちがいない。つまりこの3点セットを本当に極めてしまった人は図書館にいらなくなってしまうのだから、図書館員の将来の姿として描いても仕方がない、とは思いませんか。もちろんないよりはあった方がいい、少しあるよりは沢山あったほうがいい、それはそうです。でもそれは図書館員の姿を描くことになるのか、という疑問を消せません。

【4】「専門性」への逆風

この疑問をどんどん強めてしまうのは今図書館界に吹いている逆風です。

（1）サービスインフラ整備競争の時代

まずは大学自体がサバイバル競争の時代と言われて、サービスインフラ整備競争に入っています。つまり投資としては、客寄せの目玉になるような施設・設備・建物はドーンと造りますね。削られるのは人件費ということです。狙われるのは役に立っているのかいないのかわからないような組織ですね。

（2）派遣社員・業務外部委託の増大

そして二番目、当然ながら専任職員が減って、派遣社員・業務委託が拡大していきます。ベテラン専任の図書館外への異動も多くなります。

(3) 知識インフラの空洞化

その結果三番目、知識インフラが空洞化していきます。つまり長年図書館員が積み重ねた知識・ノウハウが引き継がれなくなっていくますね。やっと引き継いだと思ったらその人がやめてしまい、また新しい人が来ました、ゼロから教えなくちゃ、ということがしょっちゅう起こります。

(4) 図書館員の情報リテラシー低下

さらに、図書館員自身の情報リテラシーというのが追いつかなくなってきました。仕事が忙しいですから研修に行ってる暇がありません。技術革新が日々あります。データベースなんかはちょっと目を離すと中身も操作法も大幅に変わってしまいますよね。学生に指導する以前に図書館員自身の情報リテラシーが怪しくなります。

(5) 図書館員の事務能力低下

そして5番目。実は図書館員は専門家だと言おうとしていたんですが、おちおちしてられないのは事務能力が平均以下になっているのではないかという批判を学内から浴びているからです。専門家であるという以前に、普通の大学職員のレベルよりも低いのではないか。これ厳しいですね。

(6) 「専門性」論の破綻と敗北

その結果、専門性論という先程の3点セットが、結局は破れてしまった。今や司書課程のある大学でさえ、自分の大学の職員に司書課程の卒業生を採用しません。公共図書館でもそうですよね。司書は資格をとっても就職口がないという職業になっています。まあつまり単純に言うと、医者とか弁護士が資格を取って就職口がないということは普通考えられないわけですね。でもなぜか司書資格はまるで違う。このへんが非常に厳しい逆風になっていて、私たちが目指していたはずの専門性は確立されていく方向とは全く反対の、崩壊の方向へ動いている。そういう現状認識があります。

【5】『ガイドライン』が描く新しい図書館員像

さあそこで、こうした状況の中でどうしたらいいの

かというのが、日本図書館協会利用教育委員会の最大のテーマでした。日本図書館協会は '89年に利用教育臨時委員会というのをつくりました。それが後に正式な委員会になるんですね。'90年かな。ですからもう13年目に入っていることになります。

(1) 利用教育委員会と『ガイドライン』

その間ずっと追求していた仕事は「ガイドラインを作る」ことでした。ここに、刊行された合冊版があります。「図書館における情報リテラシー支援サービスのために」というサブタイトルが付いています。図書館利用教育というのは実は図書館における情報リテラシー教育支援サービスなのだ、という主張が込められています。

つまりこのふたつの概念はどう違うかというと、利用教育というのは単に図書館の利用法を教育するという名前ですよ。確かにもともとはそうだったんです。でも図書館の利用法を教えるという考え方では、図書館利用教育にならないという矛盾に直面しています。つまり少し広げて、情報リテラシーを支援するというふうにしなないと成り立たない。なぜかというと、図書館の利用法だけを学生が学んでも、必ずしも情報利用の達人になれるんですね。もちろん図書館に行かないとできないこともあります。それはデジタル化されていないもの、もっと以前から長年蓄積されてきた情報資源です。しかし新しいものについてはかなり浸食されてきました。図書館の外部に様々な情報源がもう存在していて、ホームページにいろんな公共機関や役所がデータを公開していますから、統計類なんかもインターネットで見ることができる。つまり図書館に行かなくてもできることがかなり多くなってきたということです。

(2) 『ガイドライン』の概要

その『ガイドライン』がようやくまとまりました。みなさまのお手元に抜き刷りが配られているかと思います。「目標と方法の一覧表」をご覧ください。初めてご覧になるかたもいらっしゃるようなので、簡単に解説しましょう。この『ガイドライン』が描き出しているサービスの全体像はこの表の中に集約されていま

す。

(3) 目標

まず縦の軸を見ていただくと「目標」というのが上の段にあります。そして下の段に「方法」と「評価の指標」という欄があって3区分になってますね。次、横の軸を見てくださいね。5つの領域に分かれています。第一領域は「印象づけ」という領域です。第二領域が「サービス案内」、第三領域は「情報探索法指導」、第四領域は「情報整理法指導」、第五領域は「情報表現法指導」、というふうに5つの領域に分かれています。中身をちょっと見ていただきましょうか。

1) 印象づけ

領域1の「印象づけ」の目標というところを見ると、十個の事項が挙げられていますね。「図書館は生活・学習・研究の上の基本的な資料・情報の収集・蓄積・提供機関である」とか、二番の「受信・発信・交流の拠点である」とか、三番の「メディアを提供する機関である」とかまあ様々なことが挙げられていまして、利用者にとって図書館が役に立つ場所であると、自分の生活全般で必要になる情報を与えてくれる場所であると、そして気軽に快適な居心地のいい場所であると、そういう印象を与えるというのが第一領域になります。

2) サービス案内

この印象づけの結果、図書館へ行ってみようかと思って初めてやって来た人に最初に与えるべき情報が領域2に整理されています。これは「サービス案内」と言われているもので、その図書館はどういう図書館なのか、どんな施設・設備がどこにあるのか、どんなツールがあるのか、利用規則はどうなっているのか、受けられるサービスの種類は何なのか、といったことです。様々なマナーや行事の案内まで、こういったことを一通り知ってもらえれば利用者は図書館の利用ができる、という最低レベルのこの案内をするのが第二領域です。

3) 情報探索法指導

次に一通り図書館の使い方に慣れた人は情報探索行

動に移ります。それが領域3ですね。情報探索法の意義、情報の特性、情報評価のポイント、資料の基本タイプと利用法、アクセスポイントと使い方、というようにかなり細かい話になります。情報を探索する時に必要な基礎知識をここで与えようという領域ですね。

4) 情報整理法指導

情報探索によって情報を得ますね。では情報を得た後はどうなるかということ、そこで終わりではなくて、情報の整理法に繋がっていきます。以下の事項を理解してもらいます。情報内容の抽出と加工、つまり要約、引用、言い換え、抄録、翻訳、解題などですね。こういった作業に進んでいきます。媒体は図書だけではないので、様々なメディア別に記録をとっておく方法を学びます。ノート法とかカード記録法とか、クリッピング、データベースのダウンロード、録音や録画、ビデオなんかも含まれています。三番目にファイリングの方法。四番目に、分類とインデックスの付け方。五番目、書誌事項アクセスポイントの記載方法。六番目、発想法（ブレンストーミング、KJ法等）。まあこういったふうに情報整理法の基本的な知識を与える。

5) 情報表現法指導

そして整理の段階が終わると次は情報の表現に向かいます。ここで理解し習得してもらおうのが、一番目、情報の倫理（著作権、プライバシー、校正利用等）。二番目、レポート、論文、報告書、資料の作成の仕方。構成、書式、引用規則等、こういったことを教えてもらえれば学生は自分でレポートが書けるようになります。三番目、印刷資料の作り方。パンフレット、リーフレット、ミニコミ等。四番目、AV資料の作成法（ビデオの撮影、編集法等）。五番目、コンピュータによる表現法（グラフィック、作曲、アニメーション等）。六番目、コンピュータ・ネットワークによる情報発信ということで、電子メールを送ったりインターネットを使ってホームページで発信したり、というふうに表現の領域に入って行く。七番目、プレゼンテーション技法。話し方、OHPの使い方、板書の仕方、オーディオビジュアルの使い方、マルチメディア、学会の発表等、というふうに授業やゼミでの発表から学会のプ

レゼンまでをサポートしようという内容になっています。

概略これで五つの領域のイメージはおわかりいただいでしょうか。今のは目標ですね、これを指導しようという目標。

(4) 方法

下の方に、その目標を実現するための方法が書いてあります。

1) 印象づけ

「印象づけ」の領域では、ポスター、ステッカー、ちらしなど図書館側が使える広報媒体を全部使って図書館に良い印象を持ってもらうようにしましょうということです。

2) サービス案内

二番目のサービス案内では、オリエンテーションとか案内デスク、見学ツアー、館内のサイン、動線計画、パンフレット、リーフレット、様々なものを使って案内をしましょうと。

3) 情報活用指導

領域 3 以降では、方法手段はだいたい共通ですね。レファレンスデスクでの個別の指導。それから講習会・ワークショップ等の集団的な指導。ビデオの上映会、「達人」のビデオとか。学科関連指導としては、授業やゼミに図書館員が出向いて行って指導を請け負う。実際学科統合指導とか、独立学科目があればそういった先生方との打ち合わせの段階から参加して行って、授業を丸ごと図書館側が請け負うということもあります。

まあこのような様々な探索法指導の方法を図書館側から実施を呼びかけるべきであるというふうに言っています。領域 4, 5 も方法・手段としてはよく似たものなので省略します。

4) 評価の指標

最後に評価の指標というものが下にあがっています。目標がどれくらい実現されたかを自己評価する時に以

下のような手法を使いましょうということですね。

まあとても駆け足ですがガイドラインの全体像はここに集約されているということですね。合冊版全体は全部で 60 ページ以上ありますんで、今日は全部解説できません。後日ゆっくりお読みいただきたいと思います。ここまでガイドラインについて何かご質問があればお受けしますがどうですか？ 大丈夫ですか？ では明日も質疑応答の時間があるそうですから、ここはカットして飛ばしていきましょう。

(5) 新しい図書館員像

さてそれでは、『ガイドライン』を図書館員の姿にどういうふうにつなげていくかというところに行きたいと思います。今の『ガイドライン』に描かれている図書館員の仕事からどんな姿が浮かんでくるでしょうか。

1) プランナー

それはまず第一にプランナーとしての図書館員という姿です。カウンターに座って貸出・返却をしてくるか、溜まった本を書架に戻しに行くとか、そういう姿とはちょっと違います。『ガイドライン』に書いてある方法・手段を企画し立案して、学科目の先生との打ち合わせに行くとか様々なことを考える人、企画・立案する人という姿が浮かんできます。それを仮に「プランナー」というふうに言っておきましょう。

2) コーディネーター

もうひとつはコーディネーターとしての役割が浮かんでくると思います。講習会をひとつ実施するとしますね。そうしたら一人で何でもやることはできません。当然同僚との打ち合わせをしたり会議をしますね。それから上司と話をつけたり、あるいは学外のひととの、講師を呼ぶのであれば交渉をしたり、いろんな手配をしなければなりません。OHP の機械を手配するのもそうですね。思わぬアクシデントがあるからもう大変です。(笑) こういったことをやる人、つまりコーディネーターの役割がある。

3) プロデューサー

もうひとつ、プロデューサーの役割。教材を作るとしますね。そうしたら自分で全部作るわけではありませぬ。予算が取ればビデオを作るとか、テキストを作るとか、様々な外注作業が必要になります。その時に必要になるのはプロデューサーの役割です。お金を管理して人を手配する人。この役割がないと全体がなかなか動きません。単独行動ではだめで、大きなプロジェクトになればなるほど、プロデューサーの力があるのを言います。

4) インストラクター

そして四番目。講習会があれば指導に出向かなくてはいいけません。すべて先生任せというわけにはいかないでしょう。これがインストラクターという役割です。まあ世の中にはインストラクターという職業がたくさんありますよね。カルチャーセンターに行けば生け花の先生とかお茶の先生とか、エアロビクスの先生、みんなインストラクターという同じ役割です。ですからそういった役割を図書館の中にも持ってこなくちゃいけない。それがこの指導的サービスをする人の意味です。インストラクター、どうでしょうか。

以上四つがこのガイドラインが描いている図書館員に求められている新しい役割、というのが私の考えです。公式にどこか決まっているものではありませんが、抽出するとこんなことが書いてあるのではないのでしょうか。

(6) 部分的段階的な実践の指針

さあそこで、みなさんきっと疑問が今頭の中に渦巻いていることでしょうね。こんな疑問があるんじゃないですか。「こんなにいろんなことできっこないよ」って。目標がいっぱい書いてあるので途方に暮れちゃう。じゃあですよ、いっぱい書いてあるから全部一度にできないよ、だからやれないよ、やめちゃう、となるしかないのでしょうか。そこはそうじゃなくて、たくさん書いてありますが、これを「全部一度にやろう」とは言ってないんです。『ガイドライン』は「目指そう」と言ってるんです。できることからひとつずつとりあえずやってみようという呼びかけなんです。ひとつふたつできたらじゃあ三つ目四つ目をや

ってみましょと、何年か経つといつのまにかたくさんできちゃうんじゃないか、という段階的なやり方です。

もうひとつは、最初から完璧なものを実現しようと思うから気が重くなってしまってできなくなっちゃうんですから、だったら最初はごく初歩的な簡単な形、原始的な形で実現してみましょと、そういう考え方をすればいいと思います。具体的なイメージとして言いますと、例えば情報整理法指導というとか講習会で、超整理法の「野口式」の解説とか、「山根式」とはどんなものかとか、そういう話をしなきゃいけないと思うと気が重くなってしまふんで、実際は図書館のコーナーの一角に、例えばペーパーカッターとホッチキスを置いておくとか、要らない雑誌の郵送封筒とかを山積みにして自由に書類整理に使ってもらおうとか、あるいはホワイトボードが置いてあって多少議論しながらみんなでゼミの配付資料を作るとか、そういうコーナーを作ってあげるといふことだとして、十分情報整理法指導の一部だといふふうによく考えることができると思います。

情報表現法指導についても同じですね。必ずしも講習会やらなきゃいけないというわけではないんです。図書館の中にパソコンを使って自由にワープロを打ったり、Excel を使って表を作ったり、それを出力するコーナーがあればそれだけでも表現を支援していることになると思います。もちろんそこで印刷して製本して人に資料を配れるぐらいになればとってもいいですよ。あと OHC とか OHP が置いてあってゼミ発表のリハーサルができるくらいの場所があるとか、いうことがあればもっといいですね。

それから例えば慶応大学の湘南藤沢校舎なんかでは、図書館のカウンターの手前横でビデオの器材を貸し出して使い方を指導してますよね。ビデオカメラやデッキを借りて行って、自分たちでスタジオを借りて教材を撮影して編集することができます。編集したビデオをゼミの発表で上映するといふことができちゃうんです。まあそういうふうイメージとしてはかなり原始的なものから、本格的な設備があつてきちんとした講習会をやるというレベルまで様々あると、そういう柔軟なイメージでこの表を見たらえればいかなと

思います。

【6】情報の探索支援から整理・表現支援へ

さあそこでそういった『ガイドライン』が示している全体像に対して、図書館員がこういう四つの役割を帯びて仕事を始めようと思えますね。そこで第五に、今の情報探索法支援で止まっていなくて整理・表現の領域に進んでいきたいと思いますという呼びかけに対しては、考え方をこういうふうにすると思います。

（1）大学構成員の生活シーン全般に対する情報支援プラットフォームへ

一番目は、大学構成員の生活シーン全般に対する情報支援プラットフォームに変わろうということです。図書館に来た人に何かほしい資料があれば、来たら、頼まれたら情報をお渡しするというのではなくて、大学に来ていて何か情報が必要だと思ったら最初にまず図書館のホームページを見る、あるいは図書館に来てみるというぐらいの、生活全般を支援する機関に変わろうということです。研究・調査だけとかじゃなくて、例えば電話帳も時刻表もあれば、グルメガイドや温泉マップ、「地球の歩き方」もあるというような図書館ですよ。

（2）保管・加工・出力の作業支援へ

それから情報探索の結果を保管・加工・出力する場所でありたいというふうに思います。例えば今までみなさんのところで OPAC から学生はどうやって情報を持って帰ってるんでしょうね。OPAC を引いたらメモを取るんでしょうか、それとも紙にプリントして帰るんでしょうか。そのまま出力結果を電子メールで自分に送ることを許しているところはあるんでしょうか。何でこれが大事かといいますと、利用者はせつかく電子的に検索した書誌データやアブストラクトをレポートを書く時にそのまま引用して加工して使いたいわけですよ。それがもし電子的に送ることができなくなると、紙にプリントしてあるいは自分でメモして家に帰って自分でまたワープロで打ち直すという無駄な作業が発生してしまいます。そうすると作業能率が著しく低下してしまいますし、書誌事項を書き間違っちゃ

ったりします。ですからあんまりケチなこと言わないで、表現に向けて学生がどれだけ、学生といわず先生も含めて利用者が、どれだけ効率的に表現まで持ち込んでいけるかというのをもっと積極的に支援したらどうか。そういう一連の知的作業がシームレスに流れていくイメージです。

（3）発表・レポート・論文作成支援のための指導サービス

三番目は、発表とか、レポート・論文作成支援のための指導サービスをもっと積極的にやろうと、情報を渡したら後は自分でやってねと冷たく突き放さないで、仕上げるまで図書館で支援しようということになります。結構厳しいかもしれませんが、これをやってあげれば図書館は学生に頼りにされる存在になりますね。本を書いた先生から図書館員があとがきで謝辞をもらえるかもしれません。どうでしょうか。

【7】次世代型「司書」の能力要件—サービス業と指導業の融合領域の出現—

あまり時間がないので、少し話をはしょってしましましょう。それでは次に、そういう新しいタイプの司書というのはどういう能力が要求されるかですね。ここではサービス業と指導業、ふたつの役割のちょうど融合領域にある役割を仮に「インストラクター」と呼んで、今、図書館員が目指すべきではないかという仮説でお話をさせていただきます。

（1）一般職としての常識的な業務遂行能力：事務処理、企画立案、交渉、実行

まず何より必要なのは一般職としての常識的な業務遂行能力、これが必要なんですね。これを抜きにして専門家だというふうに言っても認めてもらえません。具体的に言いますと、事務処理能力と企画・立案能力、交渉能力、実行力、こういった普通の仕事をする能力が実はとても強く望まれているということではないでしょうか。

（2）情報リテラシー支援のための指導サービス能力：対面個人指導、講習会指導

そしてその上にたってもうひとつ、情報リテラシー支援のための指導・サービス能力ですね。これも具体的に言いますと、まずは対面の個人指導です。これはレファレンスの場であれ個別の指導の場には必ず出てきます。一対一の対面で指導する場面。そして二番目は講習会で多人数を相手に指導する能力です。これは少し質が違います。人数が多くなるとかなり大変ですよ。そして今度は新しいオンライン指導という方式が出てきます。これはホームページ上で指導サービスを展開しようという点が新しい。この三つのレベルで指導サービスをできれば専門家として認めてもらえるのではないかと気がします。

【8】次世代型「司書」をどう養成するかー司書養成実験授業の試みー

(1) 資格課程での機会

さあそれでは、そういう司書はどこで作られるかという問題を考えてみましょう。司書の養成ですね。これについては司書教諭課程と司書課程、両方で今養成されてますけれど、その中にこういう新しいタイプの司書を養成するような仕組みが今のところ残念ながら備わっていません。昔ながらの授業形態で、多人数、講義形式、ノートとるだけ、寝てても単位もらえちゃうみたいなユルい授業が非常に多いんですね。そんな学生が司書として就職するとまた古いタイプの司書になる。もう泥沼の悪循環です。

これを何とかできないかということはずっと考えてましたら、ちょうど法政大学から非常勤講師のお話が来て、2科目を担当させていただくことになったんですね。司書教諭課程の「情報メディアの活用」と、司書課程の「情報検索演習」です。今年でもう4年目になって、様々なノウハウがだんだんわかってきました。それをちょっとお目にかけたかったんで、パソコン画面上でホームページを見るように設定してあります。大人数の講演会用でなくてすみません。まあちょっと見ていただきましょう。

授業を進めるにあたって、道具立てをまず揃えました。それはホームページ上にすべての配布資料を載せてしまうということですね。休んだ人も後でホームペ

ージ見れば全部載っているんで、「プリント貰ってないから宿題できませーん」とかいう言い訳が言えないようにしてあります。ホームページの表紙に、はっきりと「図書館運営のプロ、情報リテラシー教育の達人を目指そう！」というふうにスローガンを掲げてあります。この科目を取った人はもう目指さなきゃいけない(笑)ことになってます。2科目あるので年度別に、こういうふうに2002年度はこの2科目、過去の授業は下の方にある小さなボタンから遡って開いてみることもできます。ですから前の年にどんな授業やったのかということを見てから科目登録をする賢い学生もいます。ではサワリだけお目にかけましょう。

(2) 司書教諭課程「情報メディアの活用」

「情報メディアの活用」をクリックするとこういうふうになります。まず科目のトップページがあって、ここに「シラバス」「授業の効能」「授業の運営方法」「成績評価基準」「レポートの作り方」「受講生の情報環境アンケート」というのが載ってまして、冊子で配られてるシラバスを知らない人や忘れちゃった人はいつでも紙で配られたシラバスと同じ内容が見えるようになってます。「情報の探索・整理・表現の指導専門家になろう！」という標語があります。『ガイドライン』のまんまですね。(笑)つまりこの科目をとるということは、『ガイドライン』を身に付けるということと同じです。ここに学習の目標と内容と文献案内があって、もちろん『ガイドライン』が参考文献になってます。

授業の方法、評価基準、授業計画が載っています。この授業は「情報メディアをフルに活用して楽しく学習しましょう」というのが趣旨です。辛いことがあるというのは最初に断ってあります。毎回遅刻は許されませんが、毎回体を動かし、発言しなければいけません、毎回課題レポートをこなさなければいけません、最終回に発表しなければいけません、と書いてあります。大体十人くらいが履修しているので発言のチャンスは非常に多いです。

逆にこの授業では次のような嬉しいコトがあります。授業中に習ったことが、他の科目にもすぐ役に立つ。費やした時間の十倍の時間が浮く。受講生のメーリン

グリストで助け合いのネットワークができる。素敵な司書になれる・・・かもしれない。(笑) 将来仕事ができると言われるようになります、と書いてある。受講生全員をメーリングリストに登録してありますから、横の連絡、先生から学生への連絡が一つのアドレスでできるようになっています。

ココロ構え。自分の頭で独自に考えてはいけません。面倒な作業を地道にこなしてはいけません。能力不足で落ち込んではいけません。辛い課題も楽しく遊んでください。無駄に悩むのはやめましょう。最小の手間で最大の効果を狙え、というふうに脅かしてあります。初回の授業でこれを念のため説明します。まだ今なら科目登録やめることができるので嫌だったらやめてもいいよと。(笑)でも、登録するならこれを認めただよねと念を押しちゃうわけです。

運営の方法も書いてありますね。受講するには以下の準備をしてください。教科書はまったくありません。買わせません。参考文献は随時、毎回紹介していきます。予習すると余計な先入観が入っちゃうんで予習は厳禁。その代わりに新しい知識を毎回楽しく得ていくことができます、と。ノートをとる必要は一切ありません。必要事項は全部プリントで配ります。最後に配るといことですね。授業中は下を向けさせません。インターネット環境は必須ですということで、「パソコンありません」とか「アクセスできません」とかいう言い訳を言わせません。パソコンできない人はもう来なくていい、冷たいです。(笑い)

教室が変わったりしますけども、全部ホームページで見ることになってますから、学生はいやでも毎週1回は見なきゃいけないようになってます。図書館で検索ツールの実習をすとか、図書館の外のブリティッシュカウンシルで英国情報ワークショップに参加すとか、そういう教室外授業も毎年組み込んであるので学生たちは毎週ホームページで教室や集合場所を確認してから来る。それから授業ではパソコン使いますんで、フロッピーディスクを必ず持ってこさせて、演習した結果は保存して、ブックマークも保存して持ち帰る。単語登録をやったらそれも持って帰るといふふうに、自宅も教室も連続した移動書斎にしようという仕組みになってます。

まあこんなようなことをやって、学生さんたちをハード面・ソフト面で前向きな人にどんどん駆り立てていく。最初は学生は嫌々やってる人もいるけれども、だんだん慣れてくると「あ、けっこう便利だな」とか「ここで習ったことは他の科目でも使えちゃうな」とかいうことに気が付いてきます。自発的に積極的になってきます。

疑問があると最初は「先生に聞きにくいなあ」とか言ってた人も、メーリングリストに質問をアップすることを教えたら友達同士で教え合うようになります。「ブックマークどうやって保存するの?」とかいう質問が出ると、わかってる人が半分講師代わりになって教えてくれるようになってきます。メーリングリストっていうのはホントにありがたいですね。質問はメーリングリストに出す場合は全員が見る、講師宛のアドレスに送った場合は講師が答える、というように2本立てになっています。

成績の基準も最初に言ってあります。出席 40%、レポート 40%、発表 10%、授業参加協力度 10%です。大抵みんな脅かしてあるので全 12 回しっかり出て発表します。

・・・とまあこういう授業です。今日は授業の紹介自体は目的ではないんですが、『ガイドライン』に書いてあることを自分が司書になった時に利用者に確実に伝えられる人材を図書館界に送り出す、そういう授業にしたいという密かな願いが思いっきり込められているわけです。

(3) 司書課程「図書館特講」(情報検索演習)

もうひとつの科目は「図書館特講」という情報検索演習です。従来ですとパソコンのイロハと検索の仕方を習う、つまり一般教養科目と同じように、データベースの使い方とか検索式のたて方とか、利用者としてのノウハウを習っているのが普通なんです。これでは図書館利用者教育の観点が無い。この科目はそれを乗り越えようという意図を持って、「デジタル世界のサイブラリアンを目指せ!」とハッパをかける。サイバーライブラリアンというのはALAの作っている造語なんですけど、情報検索の達人であり、かつ利用指導の達人を目指せと。つまり、検索して自分が情報検

索ができるようになるというだけではなくて、その得たノウハウを今度は友達に学生に、自分が将来司書になった時に利用者に指導できるような指導法も学んでもらおうという非常に欲張った科目です。詳しくご説明したかったんですけども、ちょっと時間がないので毎回の授業の中身までにはご覧に入れられません。後ほどホームページで実物をご覧いただきたいと思います。

さあ時間がきてしまいました。10分間、いいですよ。ではあと10分ほど。はい。ちょっと早口で細かいものをお見せして申し訳なかったんですが、こういう授業によって次の世代の司書を何とか作れないかというのがこの授業の狙いです。

【9】現職者のための変身のススメー自己改造プログラムー

そこで、じゃあ学生はそれで何とかなるかもしれませんよね、今在学中の学生は。しかし司書の仕事の現職者については全国に一万五千人ぐらいいるわけですよ。その人たちが全員この授業を受けることはできないわけですから、現職者講習というのやはり必要ですよ。そこでどうしたらいいか考えてみました。一言で言える妙案というのはやはりないんですけど、とにかくまず変身していただきたいと、『ガイドライン』を実行に移せるような司書に積極的に変身していただきたいという願いを込めて、自己改造プログラムというものを考えてみました。

(1) 企画広報研究分科会：パスファインダーバンク研究

一番お薦めできるのは、私大図協の企画広報分科会に参加していただくという道です。ここでは今年パスファインダーバンクの研究というのをやっています。初期の広報研究のあとずっと利用者教育のテーマを掲げて継続的に共同研究を進めています。東地区部会なので西地区からは参加できないのが残念ですね。でも大丈夫、今度メーリングリスト会員というのを作ろうと思っています。つまり実際東京へ行かなくても、メールの上で配付資料があれば読めるし、討論にはメーリングリストで参加できるのではないかと考えています。時間と空間を越えた運営の方法を今考えてますの

で近日参加者募集の呼びかけが発表されると思います（*4）。

(2) 日本図書館協会図書館利用教育委員会：利用教育ハンドブックの刊行

二番目は図書館利用教育委員会に参加していただくのが手取り早いのではないかと思います。委員は公募されています。日図協に応募していただければ、審査の上委員になれます。実際今委員の中でも京都、大阪のかたが二人いらっしゃいますね。飛行機とか新幹線で月に1回来ます。名古屋のかたは少し有利ですよ。ご参加いただければ、もう『ガイドライン』を作る側に回れますから自然に力が身に付くはずですよ。

(3) 全国図書館大会第一4分科会「図書館利用教育」：eラーニング

三番目。全国図書館大会が今年群馬であります。利用教育委員会は第14分科会を毎年主催しています。図書館利用教育がテーマです。ちょっとお見せしておきましょうか。'95年から分科会をやっていますので、この間のテーマを見ていただきます。まず'95年「利用者の自立をいかに支援するか」というテーマで、利用教育全体のイントロダクションをやりました。'96年「図書館をいかに“売る”か」。'97年「図書館を変える《情報インストラクター》へ！」。'98年「始めよう指導サービス、めざそう情報インストラクター！」。'99年「インターネット時代の情報リテラシー支援」。2000年「情報リテラシー支援の最前線へ」。2001年「情報発信支援サービスの未来像」。そして2002年「eラーニング時代の個人学習支援ーホームページを活用した指導サービスの可能性ー」。これが今年のテーマですね。ご覧いただくとおわかりだと思います。もうズバリ『ガイドライン』に書いてあるとおり、領域2、3、4と進んできているのがおわかりだと思います。つまりずっとこの分科会に参加していると第五領域まで様々な最先端の研究と現場での実践報告を聞くことができます。こういう仕掛けを用意してきました。今年eラーニング時代の個人学習支援というテーマで、いよいよ図書館がオンラインで提供する、ホームページ上の教材の領域に入っていくことになり

ます。もう図書館に来なくても学べる仕掛けを用意しましょうというところまでできているということになります。どうでしょうか。

（４）図書館総合展フォーラム：eラーニング

利用教育委員会が取り組んでいるもうひとつのイベントは図書館総合展での講演会です。毎年 11 月、有楽町の国際フォーラムで行われます。今年の内容はこれで、今年は図書館大会と総合展とで同じ上田純美礼さんというマーケティングプランナーのかたに講師を頼んでいます。図書館界の講師は呼ばないで、（笑）違う業界の面白い人を呼ぼうというのが恒例になっています。

図書館大会の基調講演は「情報産業が描く eラーニング戦略ーマーケットとしての生涯学習ー」というテーマです。つまり図書館の生き残りに大事なネタであるはずの eラーニングマーケットが、図書館がうかうかしていると目ざとい業界に持っていかれちゃうよという話をしてもらうことになっています。すでに情報産業の側は eラーニング戦略を持っていて、この生涯学習マーケットを狙っているわけです。子供から高齢者まで様々な学習ニーズがあって、そういうニーズを今 eラーニング上に取り込もうという動きがどんどん進んでいます。今時、図書館に行って調べないとわからないとかそういう話ではもう置いてかれてしまうんですね。そういう外側の客観的な業界の状況をお話ししていただくことで図書館界のみなさんに危機感を持ってもらおうと、そういう講演会です。これが 10 月の 24 日ですね。

もうひとつの総合展フォーラムの方は 11 月 22 日、90 分の講演会をやります。「eラーニングビジネスの近未来ー拡大する生涯学習マーケット」。似てますけども、こちらは図書館界の業者の人もたくさん来るのでテーマを少し業者寄りにしてあります。みなさんもおいでになる機会がありましたら、ぜひこのふたつの講演会に参加して下さるようお願いします。

【10】結論： 指導サービスの研修・実践・発表のサイクルへ

いよいよ結論です。この新しい図書館員像を目指し

て、私たちひとりひとりがいったいどうしたらいいのか。私の考えではこれはもう指導サービスの研修・実践・発表のサイクルを繰り返していくこと、これが一番手っ取り早くて確実だろうというふうに思います。ただ『ガイドライン』をじっと眺めているだけではだめです。必要なのは実践です。それにはやっぱり研修会が必要ですね。今日の集まりもそのような研修会のひとつかもしれません。あちこちの研修で学んだことを「ああい話聞いた」で終わりにしないで、すぐ実践していきましょう。習った理屈をすぐ実践してみれば、理解が深まりますね。

さらに、実践してみた結果を今度は次の発表の機会に発表していただきたいと思います。それは研究会などでの口頭の発表でも、『図書館雑誌』への投稿でも、『現代の図書館』に論文を書いても何でもありです。とにかくどこかで発表していただく。そうすると研修と実践と発表が見事にサイクルになって、図書館界の全体での知識の共有が広がって、実践の相乗効果が出てくると思います。その意味で**研修・実践・発表**のサイクルを一回ぐるりと回してみましょよ、というのが本日の結論です。

【11】参考資料紹介

最後に、参考になりそうな出版物をご紹介しますおきましょう。

（１）『図書館広報実践ハンドブック』

まずはこれです。「印象づけ」領域については広報活動というのが図書館の中では普通に市民権を得ている言葉ですね。『図書館広報実践ハンドブック』という企画広報分科会の報告書が 8 月 31 日に出る予定になっています。あ、メモしなくて大丈夫です、このスライドは全部後でお配りしますから。「広報戦略の全面展開を目指して」というサブタイトルが付いています。もう『図書館雑誌』に広告出てます。7 月刊行予定と書いてありちょっと 1 ヶ月遅れてますけどやっとなります。300 頁、A5 版で 2500 円。分厚い本ですが、分科会の実践と研究、共同研究の成果がここに凝縮されています。売り言葉が付いてますね。「サイン計画から広報紙編集まで図書館員必読、広報担当者必携のお役

立ち虎の巻」ということですから、これはもう買うし
かない。(笑) (*5)

(2) 『図書館利用教育ハンドブック』

それから二番目「図書館利用教育ハンドブック」と
いうのが出ます。『ガイドライン』は 60 頁の冊子で
すが、今度は 300 頁のハンドブックになって出ます。
もっと詳しく細かく、どういうふうにやったら図書館
利用教育ができるかというノウハウが書いてあります。
実践事例の報告をまとめたものも入っているし、理論
的な研究も入っています。これは 9 月に刊行予定で今
最終校正段階に入っていますので、近日ニュースが流
れると思います。お楽しみに。

(3) 『新・図書館の達人』続編

そして「新・図書館の達人」の待望の続編です。第
4、5、6 巻が 10 月に図書館大会でお披露目の予定
です。今お薦めできるものはこの三つです。あれ、何
かやっぱり営業のようになってしまいましたねえ。
(笑) 非常に恐縮ですけども、これも利用教育の普及
活動の一環ですからお許してくださいね。(笑) 以上、
いただいたテーマについて大急ぎでお話しました。

今みなさん、ご質問なされたいことがたくさんおあ
りだと思いますが、残念ながら時間になってしまいま

した。(事務局に向けて) 質問用紙に後で書いていた
だいて、明日お答えするということですね? はい。
ではまた明日お目にかかりましょう。どうもありがと
うございました。

■注-----

- 1) 日本図書館協会図書館利用教育委員会ホームページ：
<http://www.soc.nii.ac.jp/jla/cue/index.html>
- 2) 『図書館利用教育ガイドライン：合冊版』日本図書館協
会、2001.8
- 3) 紀伊國屋書店ビデオ：
[http://bookweb.kinokuniya.co.jp/guest/cgi-bin/tanass.cgi?R
EV-COD=HB20](http://bookweb.kinokuniya.co.jp/guest/cgi-bin/tanass.cgi?REV-COD=HB20)
- 4) 企画広報研究分科会のホームページを参照：
<http://www51.tok2.com/home/pathfinderbank/>
- 5) 『図書館広報実践ハンドブックー広報戦略の全面展開を
目指してー』私立大学図書館協会東地区部会研究部企画広報
研究分科会編集発行、日本図書館協会発売、2002.9
詳細は本書のホームページ参照：
<http://homepage1.nifty.com/oyaoya/kikaku/>

(本稿は講演録音テープを元に再構成したものです。)